

基盤教育機構外国語科目の カリキュラム改編に伴う教育効果の検証について (初年次報告) －授業展開事例と「OIDAI 英語力診断テスト」の実施検証－

松宮 新吾・稲富百合子

A Study to Investigate Educational Effects of the Revised English Curriculum
of the Institute of Liberal Arts (the First Year Report) :
Practical Case Study and Validation of the OIDAI Diagnostic Test of English

Shingo MATSUMIYA, Yuriko INADOMI

要旨

2021年度からスタートした「総合英語」と「Online English Seminar」の教育効果を検証するとともに、学生の自己管理学習を推進するために開発・実施した「OIDAI 英語力診断テスト」は、古典的テスト理論に基づく項目分析の結果、項目困難度、弁別力、信頼性、及び、妥当性において満足できるレベルの診断テストであることが判明した。

また、診断テストの分析結果や英語学習実施状況調査の結果から、「総合英語」と「Online English Seminar」を含む新カリキュラムの実施効果は、定性的には学生の英語有能感や自己効力感の高まりとして現れていることが判明した。また、定量的な診断テストの結果からは、難易度を高めた秋学期末テストの通過率が、春学期末テストとほぼ同じレベルを維持することができていることから、より高いレベルの英語運用能力を、新カリキュラムの下で、一定レベル育成することができたものと考えられる。

一方、フルオンラインで実施された「Online English Seminar」については、学習者の英語有能感や自己効力感が、対面授業で実施した「総合英語」と比較して低くなっていることが判明した。

【キーワード】カリキュラム評価、英語力診断テスト、古典的テスト理論、項目分析

本報告書では、2021年度から基盤教育科目の一部カリキュラム改編を行ったことに伴う、初年次の新たな授業展開事例と教育効果の検証結果を報告する。

1. カリキュラム改編の概要

2020年までは、基盤教育科目の外国言語として「General Reading 1/2」(必修)、「Oral English 1/2」(必修)、「Advanced English 1/2」(選択)、「Academic English 1/2」(選択)が、カリキュラム上に位置づけられ実施されてきた。しかし、2019年度から新入生を対象として継続的に実施している「外国語(英語)学習実態調査」の分析結果として、英語に対する自己有能感や、英語学習能力、英語学習経験、英語学習に対する期待感等が有意に低くなっていることなどから、英語科目のカリキュラムを見直す必要があることが示唆された。

また、2019年度から1年次生を対象として実施している「英語学習実施状況調査」の分析結果から、大学初年次における英語学習による自己有能感形成の度合いが低くなっていることなどから、英語科目の授業内容を再検討することとした。

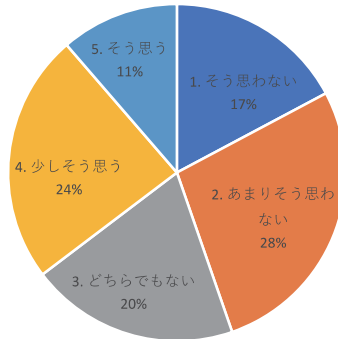
さらに、各学部学科の専門教育領域と基盤教育科目内容との有機的なリンクを構築し、教育内容の系統性や質保障を具体的に実現することが、外国語教育室の喫緊の課題であるという問題意識を持ち、2021年度から基盤教育の英語科目として「総合英語 1/2」と「Online English Seminar 1/2」を展開することとした。

1-1. 英語学習実態調査から

新入生を対象に、2021年度に実施した英語学習実態調査の結果から、英語に対し肯定的な意識を有している学生は11.3ポイントで、入学してくる学生の8割強は、英語学習に対するネガティブ経験を有していることが判明した。特に、英語運用能力に対する自己有能感を有している学生は、僅か1.4ポイントで、「少しそう思う」を含めた肯定的回答の比率は、8.2ポイントにとどまっている(表1、図1、2)。

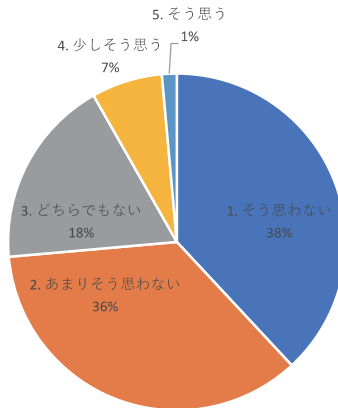
表1 英語に関する意識調査※「2021年度英語学習実態調査報告書」より抜粋

質問項目	1. そう思わない	2. あまりそう思わない	3. どちらでもない	4. 少しそう思う	5. そう思う	合計
英語が好きだ	193 17.2	308 27.5	224 20.0	269 24.0	127 11.3	1121 100.0
英語が得意だ	427 38.1	398 35.5	204 18.2	76 6.8	16 1.4	1121 100.0
外国のことに興味がある	82 7.3	103 9.2	199 17.8	365 32.6	372 33.2	1121 100.0
英検やTOEIC等の英語能力検定試験を受けようと思う	132 11.8	150 13.4	226 20.2	295 26.3	318 28.4	1121 100.0



英語が好きだ

図1 「英語が好きだ」※「2021年度英語学習実態調査報告書」より抜粋

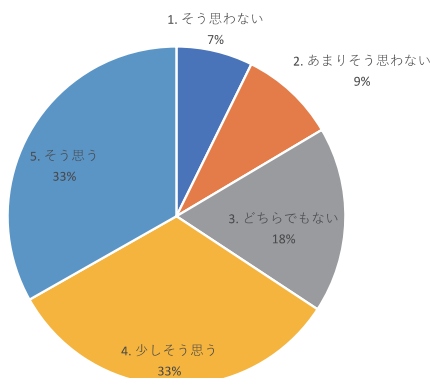


英語が得意だ

図2 「英語が得意だ」※「2021年度英語学習実態調査報告書」より抜粋

一方、英語学習そのものではなく、異文化や外国のことをはじめとしたグローバルイシューズなどに関する興味・関心は、第一評価（5. そう思う）が33.2ポイントと高くなっており、英語学習に対するネガティブ経験や意識とは裏腹に、異文化に触れたり、グローバルアフェアーズを理解したりすることに知的好奇心を抱いている学生が、多数いることが判明した。

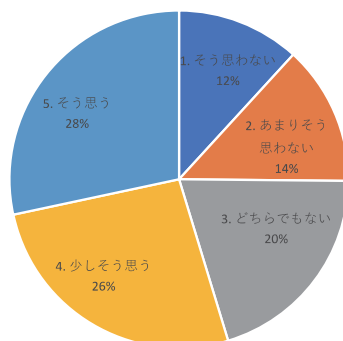
このような実態から、従来のカリキュラムで提供されている、高校までの英語教育の「焼き直し」や「やり直し」を意識した、リメディアル（治療）的科目内容による英語教育から脱却し、小中高の英語教育課程において、つまりきやネガティブ経験を多数有し、英語に対する自己有能感や自己肯定感が低くなっているものの、海外への憧れや異文化への関心を、一定レベル以上有している学習集団に対する英語教育カリキュラムの見直しを行うこととした（表1、図3）。



外国のことに興味がある

図3 「外国のことに興味がある」※「2021年度英語学習実態調査報告書」より抜粋

さらに、グローバル社会で活躍するためのツールとしての英語の意識を問う項目（「英検やTOEIC等の検定試験の受験」）に対しては、第一評価（5. そう思う）が28.4ポイントと極めて高くなっていることが判明した（表1、図4）。



英検やTOEIC等の英語能力検定試験を受けようと思う

図4 「英語能力検定試験の受験」2021年度英語学習実態調査より抜粋

1-2. 新カリキュラム（総合英語 1/2 及び Online English Seminar 1/2）のフレームワーク及び科目設定について

英語学習実態調査の分析結果から、2021年度より、1年次生向け科目として、「総合英語 1」、および、「総合英語 2」を設置することとした。

同科目は、従来本学が設置していた「英語を学ぶ（語学演習）」科目（「General Reading」、「Oral English」などの1単位科目）とは異なり、それぞれの学生が所属する学部・学科の基礎専門分野に関連する社会の諸問題やテーマ・トピックスを題材に、「英語でコンテンツを学ぶ」科目として、カリキュラム上に位置づけることとした。

すなわち、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの四技能（英語運用能力）のスキルアップをめざす英語演習科目（スキル科目：Skill Subject）とは一線を画し、内容科目（Content Subject）

として、新たに設置することとした。

そのため、一般的な講義科目同様、各回の授業において、事前・事後の学習を十分確保することが前提となり、1科目につき2単位を付与する設定とした。

これにより、英語学習に対するネガティブ経験を有する大半の学生にとっても、英語の授業内容（コンテンツ）を、各自の専攻領域や興味・関心と結びつけることが可能となり、英語学習の有意味化を図ることが期待できる。そのためには、従来の「暗号解読式」（文法訳読方式：Grammar Translation Method）の英語教授学習法ではなく、内容中心型教授法（Content-based Language Teaching：CBLT）を、広く用いた授業展開が可能となる学習教材や授業構成を、研究開発することが求められた。

また、TOEICをはじめとする、グローバルスタンダードに準拠した資格試験等の受験を希望する学生に対し、卒業後、高度国際職業人として求められるハイレベルな英語運用能力を、系統的かつ選択的に育成するための英語演習科目の設定も、併せて行うこととした。

これらのことを総合的に勘案し、内容科目として「総合英語」を、演習科目として「Online English Seminar」を、カリキュラム内に位置づけ展開することとした。

1-3. 総合英語について

「総合英語」は、Content-based Language Teaching（CBLT：内容中心型教授法）をさらに発展させた CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）に基づくコンテンツ（内容）科目として、位置づけた。

特に、「総合英語」では、学習内容の理解に重点を置き、学生の思考や学習スキルに焦点を当て、学生の異文化理解を含むコミュニケーション能力の育成や、メタ言語能力を高めるための学習活動を、系統的・選択的に実施することができる科目として、デザインした。

そのため、「総合英語」では、グローバルイシューズやグローバルアフェアーズ、さらには、ローカルイシューズやローカルアフェアーズを、相互関連させる中で、統合的、系統的に取り扱うことができるコンテンツとして、国連が推進している SDGs に関連する 17 の到達目標をトピックスとした題材を、教材とすることとした。

そして、それらのコンテンツを、各学部・学科の専門基礎領域に関わる学習内容や題材と、有機的に関連させながら学習することができるタスクや枠組みを構築し、当該学部・学科とのコーディネーションを行うこととした。

これにより、目標言語である英語の学習をはじめとした英語運用能力の育成と、コンテンツとしての題材の学習を有機的に組み合わせ、複合的英語学習を展開することが可能となる。そこで、コンテンツに対する内容理解や内容学習が先行され、理解されたコンテンツと、英語や学生が所属する学部・学科の専門基礎領域の学習内容とを、有機的にリンク・発展させることが期待できる。

そこで、コンテンツ科目として、また、SDGs に関連したグローバルイシューズやローカルア

ェアーズを柔軟に選択し、各学部・学科の専門基礎領域の学習と有機的にリンクさせることが可能な教材の選定と、授業デザインを行った。

そのために、授業デザインにおいては、コンテンツの理解学習と、発展的な学習を可能とするため、題材に関するトピック学習として、理解度クイズ、リサーチ、ディスカッション（意見構築と共有）、エッセイ課題を中心とした授業構成を行った。同時に、学習内容の定着を図るフェーズとして、語彙・表現クイズ等を、定期的に位置づけることとした。

また、コンテンツ科目の特性を最大限活かすために、少人数対面式での授業実施を行うこととした。

1-4. Online English Seminar について

英語運用能力を測定するための指標として用いられている、TOEIC や IELTS をはじめとした資格検定試験に対応し、大学生の就職活動や留学等の機会をさらに広げるために、また、コンテンツ科目として展開する「総合英語」の学習内容を、相互補完するための演習科目（1単位）を、設定することとした。

そのために、リスニングとリーディングのスキルアップを中心とした資格検定試験受験対策演習のみにとどまらず、アカデミックなレベルでの語彙・表現の習得を行いつつ、基本的な語法・文法学習を定着させることができる教材を活用し、一人ひとりの学習進度や到達度、英語運用能力に個別最適化させることができる、アダプティブな学習環境（adaptive learning）を提供することができる教材の選定と、授業の設計を行った。

「Online English Seminar」では、演習科目の特性を活かすために、自律的学習者の育成を中心に据え、自己管理学習を一層推進させることができるよう、フルオンラインによる学習環境を提供することとした。

2. 「OIDAI 英語力診断テスト」の開発と実施

新カリキュラム及び新科目の設定に伴い、それらの教育効果を測定するためのツールの一つとして、「OIDAI 英語力診断テスト」を開発し実施した。

なお、「OIDAI 英語力診断テスト」の開発に際しては、教育方法の最適化と教育成果の最大化を実現するために、総合英語のクラス編成と、入学予定者の英語運用能力に関する基礎データを得るために、入学直後に実施する（1）「OIDAI 英語力診断テスト」と、春学期末時点での英語学習成果を検証するための（2）「OIDAI 春学期末英語力診断テスト」と、さらに、秋学期末時点での英語学習成果を確認するための（3）「OIDAI 秋学期末英語力診断テスト」を、それぞれ、研究開発し実施した。

2-1. 「OIDAI 英語力診断テスト」

「OIDAI 英語力診断テスト」は、総合英語のクラス編成と、入学生のリスニングとリーディング

に関わる英語運用能力の実態を把握し、授業の最適化を図るために必要なデータを得ることを目的に、独自に開発した評価ツールの一つである。

開発した診断テストは、Web 受験が可能なもので、リスニング問題、語彙・表現問題、文法・語法問題、読解問題により構成されている。

診断テストの開発に際して、リスニング問題 25 項目、語彙・表現問題 20 項目、文法・構文問題 18 項目、読解問題 17 項目、計 80 項目により構成されている診断テスト β 版を開発し、国際教養学科 1、2 年生 50 名を対象に、3 月上旬に Web 上で試行実施した。

β 版で得られたデータに基づき、項目困難度 (item difficulty)、項目弁別力 (item discrimination) や、信頼性 (reliability) をはじめとする項目分析を行い、β 版の 80 項目から難易度、弁別力、及び、信頼性を考慮し、選択した 67 項目からなる、新入生を対象とした、「OIDAI 英語力診断テスト」を開発し実施した (図 5)。

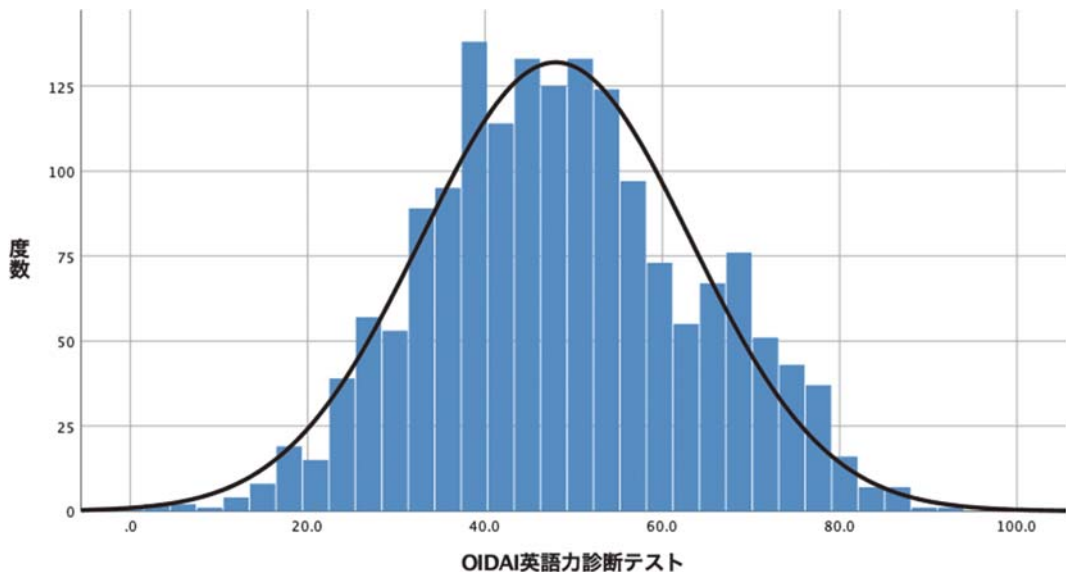


図 5 「OIDAI 英語力診断テスト」実施結果：正答率のヒストグラム

2-1-1. 「OIDAI 英語力診断テスト」の項目分析結果概要

診断テストの基礎統計量概要、及び、項目分析結果は、表 2 に示すとおりである。なお、本報告書においては、テスト項目群毎の群平均値のみを提示している。

項目困難度 (item difficulty) は、各項目の通過率平均を示している。また、項目弁別力 (item discrimination) の算出には、上位下位項目弁別力指数 (成績上位群 27%、下位群 27% による項目困難度差) と、点双列相関係数による項目弁別力指数を掲載している。

表2 「OIDAI 英語力診断テスト」実施結果概要

OIDAI英語力診断テスト2021		概要	リスニング	語彙・表現	文法・語法	読解
総問題数	67	項目(問題)数	19	19	13	16
得点	230	通過率(正答率)	51.82	59.21	38.35	41.50
受験者数	1685	上位下位項目弁別力指数	0.34	0.34	0.32	0.48
最高点	208	成績上位(H)群(27%)	0.64	0.79	0.53	0.67
最低点	0	成績下位(L)群(27%)	0.30	0.44	0.20	0.19
平均値	105.05	点双列相関係数による項目弁別力指数	0.28	0.32	0.31	0.43
分散	1318.22	信頼性係数(α)	0.65	0.76	0.62	0.79
標準偏差	36.31					
歪度	0.25					
尖度	-0.42					

2-1-2. 項目困難度と弁別力指数

診断テストやプレースメントテストに求められる項目困難度については、ほぼ妥当であること(3~6)が判明した。試験対象者が新入生であることから、 β 版の項目分析結果とは異なり、文法・語法問題と読解問題の項目困難度が、高くなっている(通過率が低くなっている)ことが分かった。また、上位下位項目弁別力指数においては、読解問題群を除いて、.4を下回っており、一部難易度の調整が必要であることが示唆されている。読解問題の指数は、.48であり、十分な弁別力を有しているものと、判断することができる。

次に、一般的に、.3以上が求められる点双列相関係数を用いた項目弁別力指数においては、規準を下回っている項目が複数あり、今後の検討が必要となる。なお、この結果は、標本依存、あるいは、テスト依存として認識されている、古典的テスト理論に基づく項目分析の限界が示されているものと、判断することができる。※分析の詳細は、松宮(2022)「項目分析と古典的テスト理論に基づく「OIDAI 英語力診断テスト」の研究開発」、『国際教養学部紀要』(2022年3月掲載予定)を参照。

2-1-3. 信頼性の検証

信頼性の一つの指標となる内部一貫性を検証するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、リスニング項目群と、文法・語法項目群が、.8を満たしていないことが判明した。質問の内容や形式を、一部改変することが求められている。その他の項目群は、一定レベルの内部一貫性を保持していることが検証された。

2-1-4. 妥当性の検証

国際教養学部1年生(国際教養学科・国際日本学科)の学生は、全員がTOEIC Bridgeを、新入生ガイダンス時に受験している。そこで、妥当性を検証するために、TOEIC Bridgeのテストスコアを、基準関連妥当性を算出するための外的基準として用いた。

その結果、開発した診断テストのテストスコアと、TOEIC Bridgeの相関係数は、 $r=.664$ ($p<.01$)で、プラスの中程度の相関があることが判明した。

以上の分析結果から、高校での英語教育を修了した新入生を対象として、新たに開発した「OIDAI 英語力診断テスト」は、項目弁別力に一部課題を残すものの、本学の新入生を対象とした、英語運用能力を測定するためのツールとして、十分に機能を果たすレベルのものであることが確認された。

今後は、項目弁別力を決定づける問題項目の難易度をコントロールしながら、英語力診断テストの研究開発を進めていくことが望まれる。

2-2. 「OIDAI 春学期末英語力診断テスト」及び「OIDAI 秋学期末英語力診断テスト」の開発と実施概要

学生一人ひとりの学習成果を確認するために、また、新たに設定したカリキュラム、及び、科目の実施状況を把握し、継続的にカリキュラム評価を行うために、各学期末に提供する英語力診断テストを開発し実施した。

2021 年度に開発した英語力診断テストの問題構成を、表 3 に示す。

診断テストの問題構成に際しては、TOEIC L&R テストの問題形式、及び、問題構成に準拠したものとして、デザインした。また、問題の難易度については、学習段階に応じて、各問題の難易度を調整した。そのために、各診断テストの β 版を、国際教養学科の上級学生を対象に試行実施し、各問題項目の難易度、弁別力、信頼性を算出し、本学 1 年生の学習段階に対応した問題を選択し配列した。

表 3 英語力診断テストの問題構成と難易度・弁別力及び妥当性

項目	4月入学時	春学期末	秋学期末
リスニング（写真描写）	3	4	5
リスニング（応答）	5	8	6
リスニング（ダイアログ）	5	12	12
リスニング（ストーリー）	6	12	9
語彙・表現	19	12	9
文法・語法	13	9	10
リーディング	16	12	19
合計	67	69	70
難易度（通過率）	48.0	41.1	41.3
弁別力(※1)	0.370	0.306	0.346
外部評価規準との相関(※2)	0.664**	0.619**	0.559**

** p<.01

その結果、入学時に実施した診断テストをベースに、春学期末には、難易度において 5% から 7% 程度高い問題を、また、秋学期末には、さらに、5% から 7% 高い問題項目を採用し配列した。

開発した診断テストは、それぞれ春学期末（7 月）、秋学期末（12 月）に、Web 上で実施し、分

析を行った(表4、図6、図7)。

表4 「OIDAI 春学期末・秋学期末英語力診断テスト」の結果概要

診断テスト	受験人数	平均値	標準偏差	分散
OIDAI春学期末診断テスト	1339	41.08	12.91	166.72
OIDAI秋学期末診断テスト	1210	41.35	14.95	223.56

表2で示した「OIDAI 英語力診断テスト」の項目分析においては、各質問項目毎の特性を把握するために、詳細なデータを掲載したが、本項においては、各診断テスト結果の概要を把握するために、全体を要約した数値のみを掲載している。

その結果、新たに開発した「OIDAI 春学期末英語力診断テスト」と、「OIDAI 秋学期末英語力診断テスト」の難易度(通過率)は、.41のレベルを示し、妥当であることが確認できた。また、項目弁別力においても、.3のレベルを示しており、一定の基準をクリアしているものと、判断することができる(表3※1)。

さらに、規準関連妥当性を検証するための指標として、最新の TOEIC L&R のテストスコアを用い、診断テスト結果と、TOEIC のテストスコアとの相関係数を求めた。その結果、入学時の診断テストと TOEIC のテストスコアの相関係数は、 $r = .664$ ($**p < .01$) で正の1%水準の有意な相関があり、その程度は、中程度であることが分かった。また、春学期末においても、同様に $r = .619$ ($**p < .01$) の中程度の正の相関があることが確認できた。なお、これら入学時、春学期末に用いた TOEIC のテストスコアは、国際教養学部で TOEIC を受験した学生のデータを用いて算出した限定的なものである(表3※2)。

一方、表5は、秋学期末診断テストと、TOEIC Bridge L&R テストの相関関係を示したものである。秋学期末には、全学部の1年生で希望する学生に TOEIC Bridge を受験する機会が与えられた。その結果、秋学期末英語力診断テストと、TOEIC Bridge のテストスコアの相関係数は、 $r = .559$ ($**p < .01$) の、中程度の正の相関があることが確認できた。

表5 秋学期末英語力診断テストと TOEIC Bridge Test の相関 N=284

テスト	1	2
1 秋学期末英語力診断テスト(12月)	—	
2 TOEIC Bridge L&R Test(1月)	.559**	—
M(平均)	31.270	365.312
SD(標準偏差)	9.792	116.686

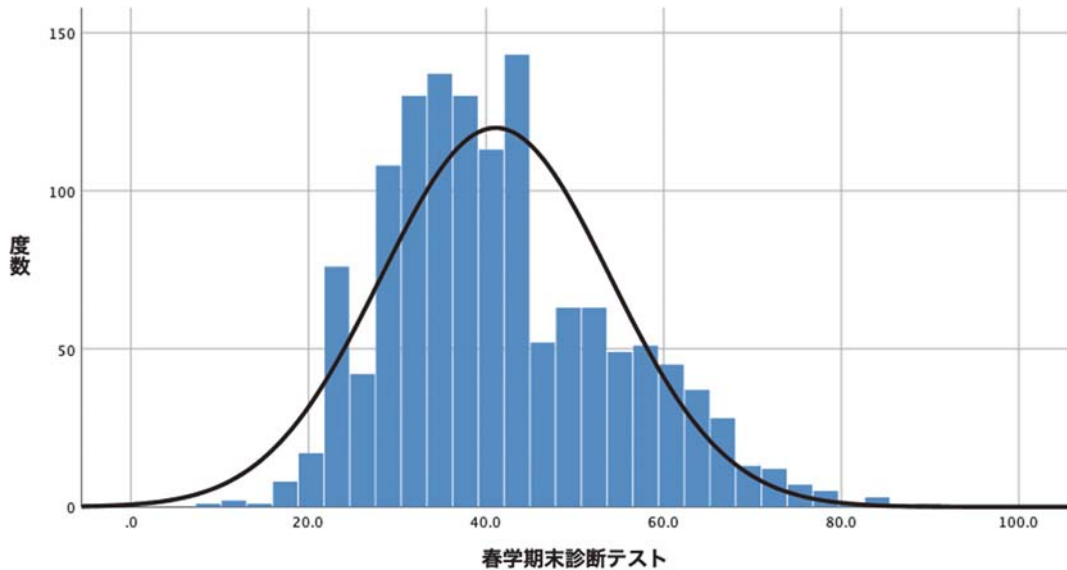


図6 「OIDAI 春学期末英語力診断テスト」：正答率のヒストグラム

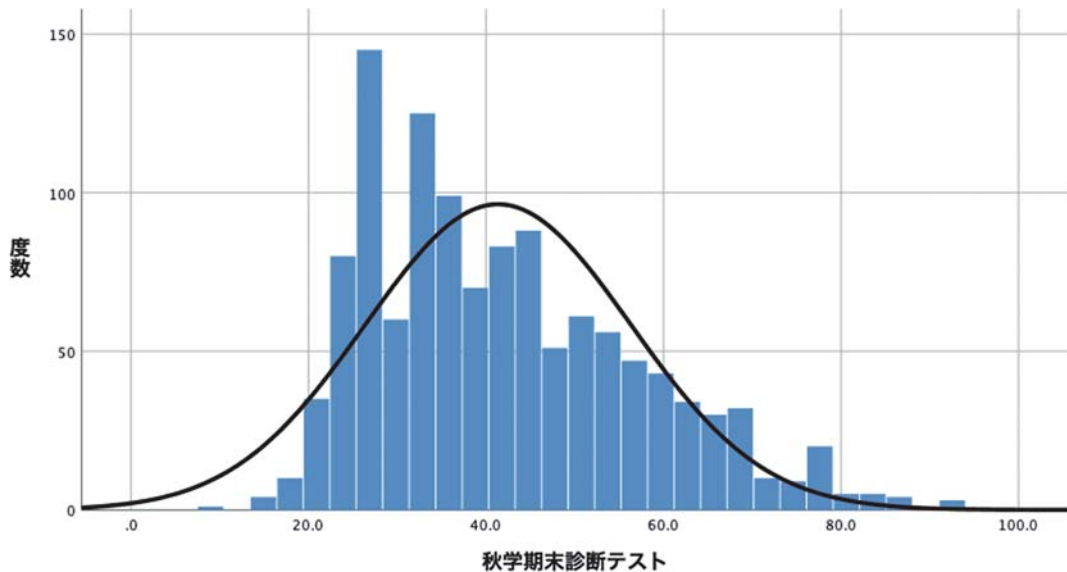


図7 「OIDAI 秋学期末英語力診断テスト」：正答率のヒストグラム

2-3. 診断テストの発展的な活用について

各診断テストの結果は、診断テスト通知票として、総合英語の授業を通じて、フィードバックされている（報告書資料参照）。

特に、毎回の診断テストの結果を自己分析し、各自の学習方略や学習内容等を省察的に捉え、学習方法を改善したり、新たな到達目標を設定したりするなど、自己の学習を管理するための手段として、有効活用することが期待できる。

このように、学習成果をはじめとする教育データを、継続的、分析的に可視化し提供することで、より自律的な学習者の育成を図ることが可能になると考える。また、同時に、授業担当者が、一人ひとりの学生の学習状況や、問題点を把握するための情報リソースとして、また、通知票を、学生とのコミュニケーションを行うための手段として、有効活用することが期待される。

以上、2021年度に開発した3種類の「OIDAI 英語力診断テスト」は、古典的テスト理論に基づく項目分析の結果、項目困難度、弁別力、信頼性、妥当性において満足できるレベルのものであることが判明した。すなわち、開発した診断テストは、追手門学院大学の学生を対象とした、リスニングとリーディング、語彙・表現、文法・語法における英語運用能力を測定するためのツールとして、一定レベル以上の精度を有する Web 診断テストであることが明らかとなった。

今後は、さらにその精度を高めるために、TOEICをはじめとした外部規準との相関係数等の関係性を追究し、テスト実施対象者である特定の集団(標本)依存から、脱却することができるよう、他の大学での試行実施を依頼・検討するなど、その汎用性を高めるための継続的・組織的な研究開発が望まれる。

3. 新カリキュラムの評価

本章では、「総合英語」と「Online English Seminar」による、新カリキュラムの評価を、英語学習実施状況調査から得られたデータと、英語力診断テストのデータ分析から考察する。

3-1. カリキュラムの定性的評価

2020年度まで実施された「General Reading」と「Oral English」による、旧カリキュラムの中で実施した、英語学習実施状況調査(2020年度)と、「総合英語」と「Online English Seminar」による、新カリキュラムの中で実施した、英語学習実施状況調査(2021年度)の質問項目の中から、英語運用能力に関する、自己有能感を問う項目を、比較分析した。

その結果、旧カリキュラムの教育効果として示された自己有能感の第一評価(5. そう思う)は、9.4ポイントであったものが、新カリキュラムでは、「総合英語」においては、21.5ポイント、「Online English Seminar」においては、13.6ポイントと、いずれも有意に高くなっていることが判明した(表6)。

表6 新旧カリキュラムにおける英語運用能力に関する自己有能感の比較

2021年度「英語の運用能力が高まっている」 (2020年度「総合的な英語力が伸びたか」)	2021年度				2020年度	
	総合英語		Online English Seminar		General Reading/Oral English	
	度数	%	度数	%	度数	%
1. そう思わない(伸びなかった)	39	3.5	95	8.6	20	3.7
2. あまりそう思わない(あまり伸びなかった)	119	10.7	152	13.7	59	10.8
3. どちらでもない	299	27.0	360	32.5	176	32.3
4. 少しそう思う(少し伸びた)	413	37.3	350	31.6	239	43.9
5. そう思う(伸びた)	238	21.5	151	13.6	51	9.4
合計	1108	100.0	1108	100.0	545	100.0

一方、第一評価（5. そう思う）と、第二評価（4. 少し思う）を加えた、肯定的評価においては、新カリキュラムの「Online English Seminar」による自己有能感が、45.2 ポイントと、低くなっていることが分かった。フルオンラインで実施した授業であることなどが、その要因であると推察されるが、新カリキュラムにおける、今後の重要な検討・改善課題となる（図 8、9、10）。

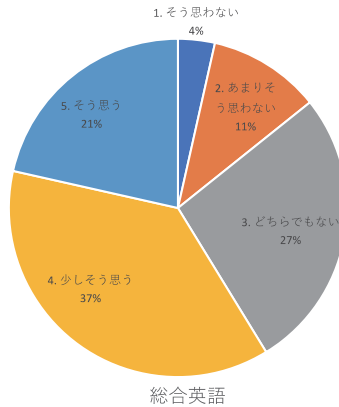


図 8 「総合英語の授業を通じて英語運用能力が高まっている」

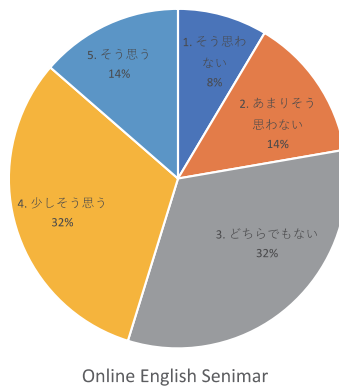


図 9 「Online English Seminar の授業を通じて英語運用能力が高まっている」

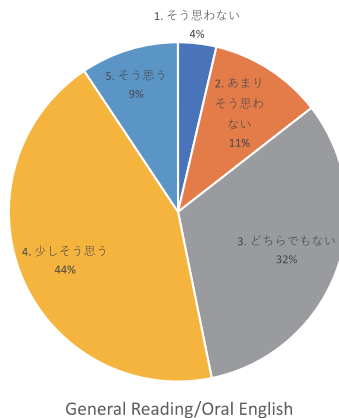


図 10 「General Reading と Oral English の授業で総合的な英語力が伸びている」

3-2. カリキュラムの定量的評価

開発した「OIDAI 英語力診断テスト」(4月実施)、「OIDAI 春学期末英語力診断テスト」(7月実施)、「OIDAI 秋学期末英語力診断テスト」(12月実施)は、それぞれの項目分析、及び、各β版の分析結果に基づき、項目の難易度を5ポイントから7ポイントアップさせている。

その結果、2-2. で掲載した表4で示したとおり、7月期と12月期の診断テストの通過率は、それぞれ41.1ポイント(7月期)と、41.3ポイント(12月期)で、同レベルを維持していたことが判明した。このことから、より難易度の高い問題にも対応することができる英語運用能力を育成することができたものと、評価することができる。

さらに開発した診断テストは、追跡的に同一問題を複数配列するなど、定量的に平均点の検定を行うことができるよう、配慮し開発したものである。

表7 各診断テスト共通質問項目の通過率

共通項目ID	D4	P4	C10-1	C10-2	C10-3	S22-1	S22-2	S22-3	R2-1	R2-2	R2-3	R2-4
入学時(4月)	0.30	-	-	-	-	0.29	0.24	0.23	-	-	-	-
春学期末(7月)	-	0.78	0.53	0.32	0.56	0.51	0.25	0.24	0.25	0.37	0.41	0.31
秋学期末(12月)	0.31	0.77	0.55	0.36	0.58	0.53	0.27	0.3	0.28	0.37	0.39	0.32
p値				*		**		*	*			

共通項目として設定・配列した12項目の通過率は、表7に示すとおりである。共通問題としたのは、リスニング問題が8項目で、リーディング問題は4項目であった。

その結果、4月期よりも7月期、7月期よりも12月期と、学習段階に応じて有意に通過率が高くなった項目が、4項目認められた。一方、有意に低くなった項目は、認められなかった。

以上の分析結果から、新カリキュラムによる英語学習の成果は、定量的にも一定レベル達成することができたものと、評価できる。

4. 授業実践事例

4-1. 「総合英語」の授業実践から

コンテンツ科目としての「総合英語」は、Web教材『ABLish』(株式会社チエル)を使用し、その中からSDGsに関連する17の到達目標をトピックスとした記事を毎週2本ずつ取り扱った。外国語教育室では、『ABLish』をもとに補助教材「総合英語ノート1/2」を開発した。その教材の内容は、『ABLish』の記事(Basic・Advanced Version)、及びその記事に対する「学習指針」、「リーディング・リスニング教材1/2」、「理解度問題」、「ディスカッショントピックスおよびエッセイ(レポート)課題のテーマ」、そして「語彙・表現リスト」から構成されている。その共通教材を使用することで、全てのクラスにおける授業の均一化を図り、一定水準の教育の質を担保することを目的とした。

学生には『ABLish』の記事を聴き読みし、『ABLish』上で理解度テストに取り組み、また2つの

ディスカッショントピックスについての下調べや意見をディスカッション欄に入力した上で、授業に臨むことを事前学習として求めた。それを手助けする資料として、『ABLish』には関連したYouTube 動画を含む様々な資料を掲載し、学生が自由に閲覧することを可能にして、与えられたトピックに対する理解を促した。授業においては、学生はまず前回の授業内容に関する復習テストを『ABLish』上または LMS (WebClass) 上のいずれかで受験し、即座に自分の理解度を把握できるようにし、その後、前回のエッセイ課題の解説を聞くように順序立てた。このように授業内容のフィードバックを確実にを行った後、学生は2つの記事の解説を聞き(資料1)、リフレクション・シート(WebClassの学習カルテ機能)を用いてその概要を入力した。その後、予習段階で課していたディスカッショントピックスに関して意見交換をし、教員がその総括を行った。リフレクション・シートには多くの学生がその日の学習トピックに関する感想を述べており、授業前に『ABLish』上で述べた意見と比較すると、学生の思考の深化やSDGsへの意識の高まりなどを見て取ることができた。事後学習では、それぞれのトピックに関する「エッセイ」(英語で150 words程度)の作成を学生に課した。

資料1 授業中『ABLish』の記事の解説で用いるスライドの一例

*according to ~ 「～によると」(情報源)
 *the same A as B 「Bと同じA」
 (例) She is the same age as me. 「彼女は私と同じ年齢だ。」
 *one billion 「10億」

According to a new report, / the world's 62 richest people / possess / the same amount of wealth as the bottom 3.6 billion.

ある新しい報告書によると／世界で最も裕福な62人が／所有する／下位36億人と同じ額の財産(富)を。

→ある新しい報告書によると、世界で最も裕福な62人が所有する財産は、下位36億人分の財産(の合計)に匹敵します。

英語によるエッセイ作成は受講生にとっては当初ハードルが高く、春学期は一部を日本語で書くことも可とし、自身の意見を発信することに重点を置いた。授業では、各学生がパワーポイントを使用して作成したエッセイを全員に公開し、各自が積極的にクラスメイトのエッセイの優れた点を取り入れるように指導した。英語エッセイの基本的な書き方を指導していくと共に、学生が実際に書いたエッセイを実例として取り上げ、その長所及び短所を解説した。また、イラストやグラフを挿入するなど視覚面に対する配慮の必要性も同時に指導した。学生の多くにとって英語エッセイの作成は初めての経験であった。そのため試行錯誤する時もあったが、徐々にエッセイの書き方を身につけ、秋学期には受講生全員が全て英語でエッセイを執筆できるようになった。学生のライティング力の伸長と共に、資料収集能力やパワーポイントのデザインへのこだわりも顕著で、エッセイ自体の内容も豊かになった(資料2)。

資料2 学生が提出したエッセイ課題の例

Do you think alternative energy sources such as solar cells, wind farms, tidal power, hydropower and thermal energy will solve our future energy needs?

Yes, I think alternative energy sources will solve our future energy needs by making the best of alternative energy sources.

First of all, geothermal power, hydraulic power generation and biomass power generation are stably available regardless of natural conditions. There are various limitations, such as environment and conditions of location but we can introduce them as much as possible.

Because solar power and wind power greatly fluctuate generated output depending on natural factors, a combination of thermal power that is easy to adjust generation power and them is necessary. We are going to install to the fullest extent based on balance between them and fuel cost burden of thermal power generation. We are also aiming towards further reducing high power generation costs.

However, we should secure the necessary bare minimum of quantity in oil-fired power just in case.

Would you please look at Table 1 and Table 2. As a result of try to streamline thermal power and drive down dependence on nuclear power generation, table 1 shows the composition of power sources in FY 2020.

Also, according to Figure 3, WWT released "The Energy Report - 100% Renewable Energy By 2050". It indicates that we can realize totally renewable energy economically and technically.

Table 1

電源別発電割合 (FY2020)	火力発電	水力発電	原子力発電	再生可能エネルギー
割合 (%)	36.1	8.0	29.5	26.4

Table 2

国・地域	再生可能エネルギーの割合 (%)
スウェーデン	59.0
デンマーク	35.0
ドイツ	20.0
フランス	12.0
日本	8.0
アメリカ	10.0
中国	15.0
インド	10.0
ブラジル	18.0
南アフリカ	45.0
エジプト	1.0
トルコ	1.0
ロシア	1.0
韓国	1.0
台湾	1.0
香港	1.0
マカオ	1.0
シンガポール	1.0
オーストラリア	1.0
ニュージーランド	1.0
フィジー	1.0
バングラデシュ	1.0
パキスタン	1.0
アフガニスタン	1.0
ミャンマー	1.0
カンボジア	1.0
ラオス	1.0
ベトナム	1.0
カンボジア	1.0
タイ	1.0
インドネシア	1.0
マレーシア	1.0
シンガポール	1.0
フィリピン	1.0
インドネシア	1.0
ジャバ	1.0
スラバヤ	1.0
スマタラ	1.0
ボルネオ	1.0
パプアニューギニア	1.0
フィジー	1.0
バングラデシュ	1.0
パキスタン	1.0
アフガニスタン	1.0
ミャンマー	1.0
カンボジア	1.0
ラオス	1.0
ベトナム	1.0
カンボジア	1.0
タイ	1.0
インドネシア	1.0
マレーシア	1.0
シンガポール	1.0
フィリピン	1.0
インドネシア	1.0
ジャバ	1.0
スラバヤ	1.0
スマタラ	1.0
ボルネオ	1.0
パプアニューギニア	1.0

Figure 3

THE ENERGY REPORT

最終授業日には、学部・学科の特性に応じたテーマでプレゼンテーションを実施した(資料3)。例えば地域創造学科では、サステイナブルツーリズムやレスポンシブルツーリズムやスマートシティなど SDGs に積極的に取り組んでいる地域の紹介をグループで行った。また、国際日本学科では、授業で学習した内容から1つ記事を選択し、関連する画像や映像を提示しながら、ニュースキャスターに扮した学生が記事を暗唱する形式で発表を行った。同時に、選択した記事に関する新たな発見や更なる関連情報を付け加えさせ、またその記事を選択した理由も説明させた。学生にはそれぞれのプレゼンテーションに対して、WebClass のチャット機能を使って、ピアレビューを行い、各発表者の長所・短所を入力させた。各学生には、自分の発表に対するレビューを閲覧し、フィードバックを行わせることで、改善点への自覚を促した。逆に、好意的な意見や賞賛の言葉は、発表者に自己肯定感を生みだし、結果、英語での発信力の自信に繋がる成果を得ることができたと考えられる。

資料3 地域創造学科及び国際日本学科のプレゼンテーション例

Shirakawa Village

Dr. Tetsu Nakamura is Killed in Afghanistan

In December, Dr. Tetsu Nakamura was killed in Afghanistan. The sad event received international attention. Dr. Nakamura was aged 73. He first went to Pakistan in 1984. After that, he moved to Afghanistan. He started an NGO there. It ran clinics mostly for Japanese soldiers and refugees. At the time, Afghanistan lacked clean drinking water. This increased the spread of Ganges. Nakamura's NGO started projects to supply clean water. Afghanistan recently gave Dr. Nakamura honorary citizenship. People worldwide have praised his efforts to help others. -World News, Current World News-

今年度は新カリキュラムの開始年度であり、「総合英語」で扱うコンテンツを各学部・学科の専門基礎領域に関わるコンテンツと有機的に関連させることが特に必要であったため、英語部会所属のコーディネーター教員と各学部・学科の教務担当教員等とのミーティングを春学期開始前に行った。その際に各学部・学科からの要望も聴取した。例えば、国際日本学科の教員からは、SDGs に

加えて、クールジャパンや在日外国人の直面する問題等を含む記事を取り入れてほしいとの意見を得た。『ABLIsh』にはテーマ別に過去の記事も遡って検索ができるため、授業にその要望も盛り込んだ。夏休みの課題においては、学生が所属する学部の特長分野に関わる記事を『ABLIsh』から選択し、各学部の専門性に即した英語学習が可能となるよう配慮した。

来年度も引き続き、「総合英語」の「コンテンツ科目」としての特性を最大限に生かした授業運営を進めていくが、同時に、英語のスキル面の養成も視野に入れ、英作文やリスニングやスピーキングの練習問題を「総合英語ノート」に適宜追加し、改訂版を開発していく予定である。

4-2. 「Online English Seminar」の授業実践から

「Online English Seminar」はフルオンライン（オンデマンド）授業で、1 クラス 120 名程度の大人数クラスであるため、各担当教員の細やかな指導が重要である。本授業では、Web 教材『TOEIC® L&R 対応 総合英語コース 8 (Practical English 8: Adaptive Focus 50 Lessons)』（Reallyenglish）及び WebClass 上に掲出する課題を毎週期限内に完了することを課した。『Practical English 8』は教材付属の「診断テスト」の結果に基づき、受講中は常に各学生のレベルに応じた最適な 50 レッスンが提供され、全てのレッスンを 70% 以上の正解率で修了することを合格の条件とした。加えて、各自が学習した重要語彙・表現を例文付きで「単語帳」として毎週提出させた。「単語帳」は『Practical English 8』の内容とリンクしており、この 2 つの課題を同時に行うことで、理解度の充実を図った。また、共通の「単語テスト」を毎週実施したが、事前に提供した語彙リストの中から出題し、語彙力強化を図った。さらに、口頭言語活動の評価として、指定した例文や表現等の練習を行った上でその成果を録音し提出させた。これらの課題の成果が、「OIDAI 英語力診断テスト」ならびに TOEIC Bridge® Test の受験結果に反映されるよう、学生には着実に課題に取り組むよう指導を行った。

フルオンライン授業における教員と学生のコミュニケーションを図る一つ的手段として、OEN（「Online English Seminar」と「応援」の語呂合わせ）と題した Newsletter を週 1 回（第 1 号～第 28 号）発行した。諸連絡や課題に関する指示のみならず、英語部会の教員によるエッセイや、E-CO（English Café at Otemon）のキャサリン・ソントン先生とクリス・フェルプス先生による英会話のコーナー “This Week’s Idiom” や E-CO の活動案内を掲載した。春学期は未読の学生が一定数存在したことから、音声課題の内容を、春学期に行っていた『Practical English 8』の演習から、秋学期は “This Week’s Idiom” の英会話に変更した。その際、ソントン先生とフェルプス先生の協力を得て、音声ファイルを提供いただいた。これが功を奏し、OEN の閲覧回数及び音声録音課題の提出率の伸びを確認でき、また、毎週新しいイディオムを学習できるため英会話の連載を楽しみにする学生も増えた。また、教員によるエッセイも多岐に富み、各担当教員の専門分野を生かした読みものや、英語学習のアドバイス（YouTube を使用した学習例）や、海外での体験談など、コロナ禍で海外渡航が難しい学生への英語学習に対するモチベーションを高める工夫を行ってきた。学生からの感想や反響も得られ、それは OEN を編集する側にとっても大きな励みとなった（資料

4)。

学生とのコミュニケーションを図るもう一つの手段として、リフレクション・シート(WebClass の学習カルテ機能) の導入が挙げられる。これは毎週の学習記録であり、半期 13 週分、学生の学習の振り返りの場として活用すると共に、教員側は各自の課題の進捗状況や感想を確認し、コメントを返すなどして、フィードバックを行った。リフレクション・シートから学生の感想を以下に一部抜粋する(原文のまま)。

- ・継続して行うことで文章を読むときのコツをつかむことができ、スムーズに読めるようになった。
- ・1 年間のレッスンを通して、自分の苦手な部分も明確になったので、これからも英語の学習を継続していきたいと考える。
- ・今回でこの授業はいったん終わるが英語の勉強はモチベーション下げずに続けていきたいと感じた。
- ・OES が終了してもこれからも E-CO などを利用し英語学習を積極的に行っていきたい。
- ・問題が週ごとに難しくなってきたと考えるが、Reallyenglish で様々な事について学んできたため少しでも結果に現れてほしいと考える。
- ・この英語学習を通してすべての力が始める前に比べると向上したように思う。
- ・1 年を通して Newsletter で海外の文化を学べたり、高校の授業では習わなかった日常的に使える言い回しを音声課題で学ぶことができました。また、テストをきっかけに思い出すことができて良かったです。
- ・春休みは資格を多くとりたいため、英検や TOEIC の勉強をしようと思う。

以上、学生の感想からも、「Online English Seminar」を通じて、自律学習の有効性が確認でき、また学生自身による弱点の発見及びその克服を促したと考えられる。また、オンデマンド授業において、学生の英語学習のモチベーションを維持するために、Newsletter の発行やリフレクション・シートのコミュニケーション・ツールは一定の教育的効果があったと考えられる。

今年度、「Online English Seminar」の実施に当たって、事前に WebClass 上及び Haruka メールを通じて、Web 教材の購入や教材の操作方法を周知することに傾注したが、開講初年度であったため、連絡事項の見落としや、教材の未購入、あるいは使用方法の理解不足が散見され、学習の準備が整わない学生や、課題の進捗状況が芳しくない学生が一定数存在した。次年度においては、事前に対面でのオリエンテーションを実施し、受講者全員が一律に学習を開始することができるように指導を行う予定である。今年度は学習不振者の指導について、教務課のスタッフ及び各学部・学科のアカデミックアドバイザーを含む先生方のご協力を得ることができた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

資料4 OEN のイメージ



教員によるエッセイ



異文化理解の例：イギリスのクリスマス



“This Week’s Idiom”



E-CO の活動案内

報告書資料:「OIDAI 英語力診断テスト」通知票



OIDAI英語力診断テスト2021 結果通知票
For Personal & Academic Development

学部コード
曜日
時間
クラス
担当教員

学部(学科)	学籍番号	名前
【解答時間】	00時07分	※標準解答時間より1時間30分です。解答時間が極端に短い、或いは、長い場合はテスト結果の信頼性が疑われます。

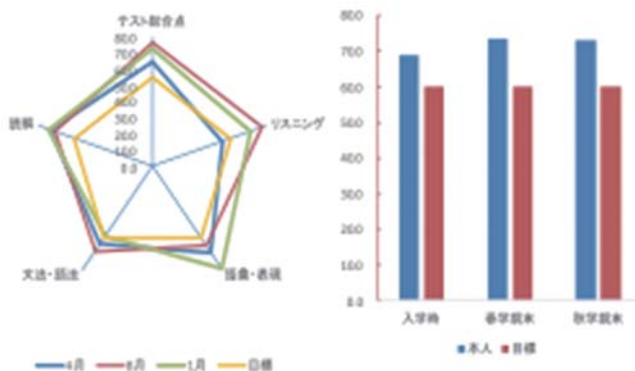
6-Jan-22

※ワンポイントアドバイス1: テスト総合点(素点)は、各診断テストにより技能数や配点、難易度が異なるため、各自の英語力を診断するための指標にはなりません。難易度に対応する「正解率」と各項目での相対的な位置を示す「偏差値」(平均が50となるように変換)と、その基準からどれくらい高いかまたは低いかを示す数値(標準)を基準として各自の成績を分析してください。
※ワンポイントアドバイス2: 目標とする「正解率」は各項目に対し85%以上です。※追加受験者があった場合、偏差値等が更新されています。

3. 目標設定

	項目	テスト総合点	リスニング	語彙・表現	文法・語法	読解
秋学期末 (1月)	素点	51	24	10	6	11
	偏差値	72.8	68.9	78.3	53.2	73
	【正解率】	72.9	75	90.9	42.9	84.6
	平均点	28.2	13.7	4.2	5.2	5.1
	(配点)	(70)	(32)	(11)	(14)	(13)
	(問題数)	[70]	[32]	[11]	[14]	[13]
春学期末 (8月)	素点	97	58	5	20	16
	偏差値	76.5	77.0	60.8	65.4	68.5
	【正解率】	73.5	77.8	83.3	66.7	66.7
	平均点	50.9	27.6	3.3	12.4	7.5
	(配点)	(132)	(72)	(8)	(36)	(24)
	(問題数)	[69]	[36]	[8]	[16]	[12]
入学時 (4月)	素点	158	35	39	26	58
	偏差値	64.6	49.2	66.3	60.0	71.6
	【正解率】	68.7	44.3	88.6	59.1	92.1
	平均点	105.1	36.3	26.3	16.9	26.2
	(配点)	(238)	(79)	(44)	(44)	(83)
	(問題数)	[67]	[19]	[19]	[13]	[16]

2. 項目別偏差値リーダーチャート&成績推移グラフ



【春学期】
リスニングの成績が悪かったためまずはリスニングの力を身に付けたいと思います。まずは読んでいる単語を正確に聞き取れるようになりたいです。次に、聞き取った文の意味をすぐに理解できるようにしたいです。リスニング以外にも文法の力もつけたいです。しっかりと使うことのできる文法があれば、いよいよ理解できていない文法もあるので、そういう文法はしっかりと使えるようになるまで練習して理解して使えるようになりたいです。語法についても同じで、頭に入っていて使えるものもあれば、頭に入っていないものもあるので何度も繰り返し使えるようになりたいと思います。

【秋学期】
前回、悪かったリスニングの成績が上がっていたので、よかった。でも、きちんと言葉が分かって解けた問題ばかりではなく、分からなくて、何となくで解いてしまった問題もあるので、そういうことのないようにリスニングの力を付けていきたい。語彙・表現と文法・語法もついでに、正解率が下がってしまったので、基礎的な部分から復習しようと思った。高校生の時に比べて、単語や表現などの確定する分野の力が落ちていると自分でも感じているので、これからは単語帳を見直す時間を定期的につけていきたいと思う。また、資格試験の勉強も始めていきたいと思う。

※ 64 (原文のまま)

追手門学院大学

参考文献

- 阿部真理子、ブライアン・ウィスナー、酒井英樹（2008）. 古典的項目分析とラッシュモデリングを用いた英語熟達度テストの分析. 『高崎経済大学論集』, 50, 3-4, 125-134.
- J. D. ブラウン. (1999). 『言語テストの基礎知識：正しい問題作成・評価のために』 東京：大修館書店.
- 松宮新吾（2021）. 「2021 年度英語学習実態調査報告書」（追手門学院大学外国語教育室英語部会 FD 研修資料）
- 大友賢二（1996）. 『項目応答理論入門：言語テスト・データの新しい分析法』 東京：大修館書店.
- Y. Wei (2017). Monitoring Score Change Patterns to Support *TOEIC*® Listening and Reading Test Quality. <https://doi.org/10.1002/ets2.12186>（参照 2021 年 12 月）